

学芸員が厚真町の歴史を解説します!

厚真日誌

まちの学芸員 **乾 哲也**

小学校6年生の社会科の授業で考古学に目覚め、札幌学院大学卒業後、奥尻町、白老町、礼文町、千歳市で発掘調査を行う。平成14年から厚真町に根差した学芸員。



第2回

北海道150年のキーマンが見た160年前のアツマ〔2〕 松浦武四郎が歩いた厚真川下流域の様子

北海道の名付け親、松浦武四郎は安政5年(1858年)6月21日に苫小牧勇払会所から厚真のトンニカ村(富里)に入り、3泊4日ほど滞在しています。現代の暦では7月31日の夏真つ盛りの季節、武四郎は数え年で41歳の時でした。

この時の記録が『東西蝦夷山川取調日誌』の「安都麻誌」(本文中は安都摩と表記)や『東蝦夷日誌』に残されています。

北海道の名付け親、松浦武四郎は安政5年(1858年)6月21日に苫小牧勇払会所から厚真のトンニカ村(富里)に入り、3泊4日ほど滞在しています。現代の暦では7月31日の夏真つ盛りの季節、武四郎は数え年で41歳の時でした。

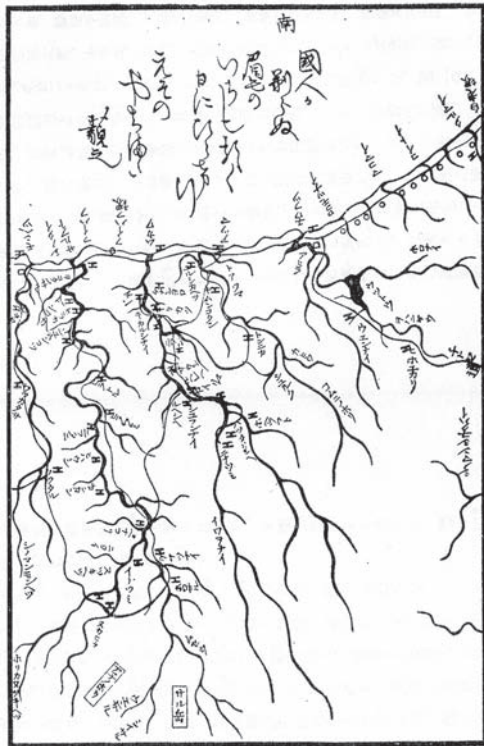
町内の91カ所の地名や5カ所の「コタン(村)」の様子、124人のアイヌの人々が暮らしていたことなどが記されていますが、そのほかには「アツマ?それともアツマ?」

160年前はアツマと濁って呼んでいましたが、元々は現在と同じくアツマと澄んだ表現でした。

「アツマは今の浜厚真」
今の厚真町の中心部は役場がある厚真川中流域ですが、当時は河口部の渡し場をアツ

マと記しています。
「畑作が盛んな厚真」
厚真町は土地が豊かで、ひえ・あわ・インゲンマメ・仙台かぶなどを育て、多いところでは、合わせて20俵も収穫していました。

このほか、「大洪水の厚真川」、「働き者で親切なアイヌ」、「ウグイが多いアツマ」、「冷泉湧く不凍の井戸」、「ノヤスベの滝」などについても記されています。



白老地区から日高門別地区までの地図
(松浦武四郎『東蝦夷日誌』国立国会図書館蔵)

アツマ・ユルシカヘツ・トンニカ・カヒウ・シュルクなどの地名が記されています。



ハスカップの木(松浦武四郎『蝦夷山海名産図会』)
松浦武四郎はハスカップのことを「木忍冬(スィカズク)の一種 花黄色にして、実赤し。アイヌ好いて喰す。」と記しています。武四郎は写真的にアイヌの人々の暮らしや道具、動植物も描き残しています。



ユウフツ浜でのイワシ地引き網漁の様子
(松浦武四郎『蝦夷山海名産図会』)

白老町にかけての砂浜は「東海第一番也」と記しており、アツマからもコタンの約3割の人たちがイワシ漁への「雇い」に出ています。コタンには老人や子ども、病人が残るのみでした。

発行 / 北海道厚真町
企画・編集 / まちづくり推進課企画調整グループ
ホームページ / <http://www.town.atsuma.lg.jp/>

〒059-1692 北海道勇払郡厚真町京町120番地
電話 / (0145)27-2321 (代)
メールアドレス / atsuma@town.atsuma.lg.jp